

平成 20 年 3 月 21 日

Student Initiative Project 事業研究成果報告書

申請代表者
専攻：比較文化学専攻
学籍番号：20040202
氏名：玉山 ともよ 印
教員責任者：岸上 伸啓 印

1. プロジェクトタイトル

「育児と学業の両立をめざして--子どもと研究の両方をはぐくむ」

2. 実施場所

国立民族学博物館 大学院演習室I

3. 実施期日

平成 19 年12月15日 (土)

4. 成果報告

●プロジェクトの内容

慶應義塾大学非常勤講師の山本昭代さんをお招きし研究会を開催した。内容は、山本さんのライフヒストリーを中心に、育児をしながらどのように国内外で調査研究に従事し、どのような利点と苦労があったか、さらに子どもを通じての研究視覚の形成について等の講演を聴き、その後参加者とのディスカッションを行った。参加者は、比較文化学専攻 4 人、日本歴史研究専攻 2 人、教員 1 人の計 7 人であった。

本事業は、文化科学研究科・比較文化学に所属する学生からなるサークルである「子育て院生の会」が主体となり、子育てと学業・研究活動を同時に行ってこられた先輩研究者を外部から招き、育児と研究活動の両立の可能性について検討を重ねていく第 1 回目の研究会として行われた。

講演者のメキシコ・ワステカ先住民農村の研究者である山本さんは、メキシコの社会人類学高等調査研究所で修士課程に進学し、在学中に出産した。そして乳児を抱えながら農村でフィールド・ワークを行い、修士論文を提出。その後、東京外国語大学で博士課程に進み、学生として研究活動を続けながら、再度、5 歳になる息子連れて、メキシコで 1 年間のフィールド・ワークを行った。シングル・マザーとしてメディア等から逆に調査・取材される側にも立たれた経験から、非婚であることが「惨め」であると一方的に書かれるなど、「表象の暴力」を味わった点についても触れられた。それらの研究成果は『メキシコ・ワステカ先住民農村のジェンダーと社会変化—フェミニスト人類学の視座』（明石書店、2007年）として出版されている。

当日の参加者との質疑応答の場では、育児と研究活動との時間配分の仕方や、研究者としての就職の実情、生活上の経済的側面など具体的な話にも及んだ。多様な学生の立場から様々な研究方法を模索する上で、子育てと研究生活の両立という観点からの研究会を開催した。

●本プロジェクトの実施によって得られた成果

研究会の開催を通じて、さまざまな研究活動のあり方を検討することは、育児中の学生だけではなく、家族の介護をしている学生や仕事をもつ社会人学生など、さまざまな条件や環境にあっても研究活動を続けていく全ての人たちにとって有意義である。つまり、現在では学生のバックグラウンドも研究活動のあり方も多様化しており、それらを総合的に支える社会的基盤が求められている。例えば、文系博士課程を終えてすぐに大学等の教育研究機関で就職することは非常に困難で、研究を続けたくとも日本学術振興会の特別研究員になるなど、ある一定のルールに乗らないかぎり、研究者としてやっていくことは難しい。このように、子育てをしながら研究するという可能性を考えることは、年齢や性別などの諸条件におのずと拘束されてきた研究環境全体を見直して考えることを意味する。以上のような理由から、現在育児中の当事者だけでなく、それ以外の多くの人たちと研究生活活動とライフデザインにまつわる問題を共有し、問題解決のために活動していく上で、研究会開催は最初の第1歩として成果があったと考えられる。

またディスカッションで大学や研究所などにおける職員や学生の利用できる託児室の必要性などについても話し合わせ、保育所を設置している早稲田大学や、京都大学・女性研究者支援センターなどの先駆的な例も紹介された。このような研究会を開催することによって、情報交換やネットワークづくりにも貢献し、今後もこのテーマの議論を発展させていくきっかけとなることができたのではないだろうか。

●本事業について

本企画を計画する上で、幼い子どもを持つ者が研究会に参加しやすいように託児を設けたいというのが当初の希望であったが、どの費目にも当てはまらない或いはベビーシッターの人件費としては計上できない、また万が一事故があった場合の対応ができない等、託児設置という点については断念せざるをえなかった。事業実施にあたっての予算使途におけるより柔軟な措置を可能性として今後残しておいていただくことはできないだろうか。

また専攻間を越えるプロジェクトであることの必要性が強く打ち出されているがために、かえってそのことが制約となり、普段交流のない他専攻と協働して企画運営することの難しさが浮き彫りにされた。もちろんこの活動を契機として、他専攻の院生と交流を深めることができるのは大変魅力的であり、学問的にも大いに刺激になると考えられる。しかしそれを0（ゼロ）から創り出すための工夫がもう少し必要なのではないだろうか。せっきく SIP 事業の予算が豊富にあるのだから、自分の博士論文研究以外のテーマでも関心のある分野へ新しく興味を持って踏み出すきっかけとして、学生企画委員などを活用しながら、より「交流」に重点をおいた企画が生まれやすいよう、SIP 事業が活用されることをこれからも期待する。